

学校と社会をつなぐ調査

第1回調査(2013年秋実施)分析結果報告

—1時点目(高校2年生)報告書—

2014年6月

京都大学 高等教育研究開発推進センター
学校法人河合塾 教育研究開発本部



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

河合塾

はしがき

いま大学は、学生の学びと成長をもとにした学習・学生中心主義の教育へと転換をはかろうとしています。学士課程答申（2008年）・質的転換答申（2012年）をもとに進んでいる昨今の大学教育改革も、大きく見れば、学生がしっかり学び、そして成長する場としての大学教育の構築であると言えます。もはや、大学卒の資格や特定の大学のブランド力だけに頼って、高校から大学へ進学する時代は終わりを告げているとさえ言えます。

しかしながら、京都大学と電通育英会とが共同で進めてきた大学生調査（『大学生のキャリア意識調査』。2007年から3年おきに全国調査を実施している。詳しくは <https://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/> を参照のこと）の結果からは、大学が教育改革をいくら進めても、主体的に学ぶ力、豊かな対人関係や活動性、高いキャリア意識などを持たない学生は、十分に成長していない、できていないのではないかと理解されるような結果が示されてきました。具体的に言えば、学び成長する学生はそうでない学生に比べて、「教室外学習」「対人関係・課外活動」「キャリア意識」の特徴を強く持ちます。キャリア意識というと、大学関係者の多くはまだまだ就職と繋げる程度のものとしか理解していないことが多く、それが学習に及ぼす影響力を過小評価しているのが現実ではありますが、先の見えにくい時代において、学び成長する者のキャリア意識は高いというのが、大学生調査の一貫して示してきた成果でありました。また、学習が単なる知識習得型からアクティブラーニング型へと拡張する中で、コミュニケーション力や対人関係力が弱い学生が、拡張された学習についてきていないのではないかとという新たな仮説も、データから推測して考えられるようになってきました。

いま大学は、学生の学びと成長をしっかり実現していくためにも、教室の中での授業改革のみならず、学生の「教室外学習」「対人関係・課外活動」「キャリア意識」に関する能力や態度まで、改革の手を総合的に伸ばしています。言うまでもなく、主体的に学ぶ力、豊かな対人関係や活動性、高いキャリア意識を、大学生になって一から身に付けていくことは難しく、高校までの基礎があつてこそそのものであると理解されます。新しい時代における学校教育（高校・大学・短大・専門学校等ならびにその接続）の役割（学校と仕事・社会との接続）を明らかにするために、本プロジェクトは、高校2年生を対象に調査をスタートし、約10年間彼らを追跡調査いたします。そして、どのような高校生がどのような大学生（あるいは短大生、専門学校生等）になり、どのような社会人になっていくのかのパターンを解明します。本報告書は、その1時点目の結果報告書であり、2時点目以降の調査結果を理解していくための基礎資料となります。

最後に、調査にご協力くださいました全国の高等学校・生徒のみならず、並びに教育委員会の関係者に、厚くお礼を申し上げます。

2014年6月

京都大学 高等教育研究開発推進センター
学校法人河合塾 教育研究開発本部

目次

はしがき	1
目次	2
第1章 なぜ10年トランジション調査か-調査の背景と概要-(溝上慎一)	3
第1節 調査の背景	3
第2節 10年トランジション調査に向けて	4
第3節 10年トランジション調査の概要	5
引用文献	8
第2章 生徒タイプの分析から見えてくる高校生の特徴(溝上慎一)	10
はじめに	10
第1節 生徒タイプの作成	10
第2節 生徒タイプに関するその他の分析	18
第3節 まとめと2時点目(大学1年生)に向けての課題	27
第3章 高校生の生活に関するジェンダー差(伊佐夏実・知念渉)	29
はじめに	29
第1節 設問別に見たジェンダー差	29
第2節 共学と別学の差異	38
第3節 ジェネリックスキルとジェンダー	42
おわりに	44
第4章 事例研究-島根県立横田高校-(椋本洋)	45
はじめに	45
第1節 横田高校の諸特徴	46
第2節 アンケート調査結果の内容	48
第3節 生徒インタビューの結果	60
第4節 横田高校の今と未来予想図	68
おわりに	79
巻末資料A 単純集計結果	81
巻末資料B 調査票(高校2年生対象)	119

第1章 なぜ10年トランジション調査か —調査の背景と概要—

溝上慎一（京都大学）

第1節 調査の背景

知識基盤社会、社会の情報化・グローバル化、生涯学習社会など、社会の大きな変化を背景に、いま大学教育の現場は急激に改革を進めている。その特徴のポイントを端的に表すならば、それは、教員が何を教えるかではなくて、学生が何を学びどのように成長するかという「学生の学びと成長（student learning and development）」の観点に求められる（溝上, 2012, 2014a）。その観点に基づく大学教育改革は、学生に学習をさせ、さまざまな活動の機会を与え、育てる、そうしてしっかりと育てた学生を社会に送り出す教育機関へと変わっていくための改革であると言える。

ところが、京都大学高等教育研究開発推進センターと公益財団法人電通育英会が2007年より実施している「大学生のキャリア意識調査」^{注1}が年を重ねて順調に実施され、途中2度の追跡調査もおこなわれるなかで、徐々に、大学教育の問題は、入り口手前の高校との接続（高大接続）、出口の就職・初期キャリアとの接続をもって検討されていかねばならないと考えられるようになった。というのも、大学生の成長を規定する変数として見出されてきた、とくにキャリア意識（二つのライフ）や教室外学習（授業外学習 / 自主学習）が、大学生の3年、4年の間でなかなか変わりにくいという結果が出てきたからであった^{注2}。キャリア意識や教室外学習は、主観的な意識や個人の意志に基づく行動であるから、「人は本気になればそんなこといつでもできるようになるよ。気にしなくていい」とおっしゃる方もたくさんいたが、なかなか「本気にならない」のが人である。わかっている人も人は「そんなこと」をなかなかできないものだし、人はそんなに簡単に変わらないものである。これが、上記のデータから言えることであった。

大学生のときの経験（学習や生活のしかた、キャリア意識等）と職場での仕事のしかたとの関係や構造については、東京大学の中原淳氏、電通育英会の助力を得て調査をおこない検討した。2012年3月に予備調査、4月に本調査を実施し、会社員（25・39歳）3,000名のデータを収集して分析した。その成果は、中原・溝上編（2014）『活躍する組織人の探究—大学から企業へのトランジション—』（東京大学出版会）としてまとめられているので、詳しくはそちらを参照して欲しいが、簡単に関係する結果だけを述べると、次のようになる。

注1 各回の調査結果は <https://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/> を参照のこと。同データを用いた結果は、溝上（2009, 2012）にも示されている。

注2 保田・溝上（2014）に整理したデータ結果の知見をまとめている。なお、キャリア意識（二つのライフ）や教室外学習（授業外学習 / 自主学習）が大学生のあいだで変わりにくいことは、筆者が関わっている大阪府立大学のIRデータでも同様の結果が出ている（たとえば、高橋・深野・溝上, 2014）。

第 1 に、大学時代の豊かな人間関係が、卒業後の職場での仕事のしかたにポジティブな影響を及ぼしていたことである。ビジネスパーソンからは、卒業後仕事に役立つ大学時代の経験として、クラブ・サークル活動やアルバイトを通しての豊かな人間関係がよく挙げられてきたが、調査の結果はまずそれを確認するものであった。

第 2 に、勉強それ自体は卒業後の職場での仕事のしかたにネガティブな効果を及ぼしていたが、主体的な学修態度を採る勉強のしかたをしていれば、それは先の豊かな人間関係といった、これまで多くのビジネスパーソンが重要な経験だと述べてきたことと同程度の効果を示していたことである。

第 3 に、高いキャリア意識（二つのライフ）が、卒業後の職場での仕事のしかたにポジティブな影響を及ぼしていたことである。その影響度は、第 1、第 2 でまとめてきた豊かな人間関係・主体的な学習態度よりも高いものであった。この結果は、これまで大学生を対象とした調査で、二つのライフが学習や知識・能力の獲得に効くとされてきたこれまでの結果とかなり整合するものであった。

これまで多くのビジネスパーソンは、学生時代に将来のことをさほど考えてきたとは言わなかったし、この調査の結果からも全サンプルの 50%の者は高校・大学時代とまったく将来のことを考えてこなかったと回答した。そして、高いキャリア意識を持つ学生がよく学び、幅広く活動をし、そして知識や能力を身につけているという結果を提示しても、多くの場合、訝しがられるばかりで、大学教育と仕事の世界をつなぐのはかなりハードルが高いと考えられてきた。しかし、この調査結果からは、将来の見通しを持つ、加えてその実現に向けて努力することが、豊かな人間関係や主体的な学修態度と同等、あるいはそれ以上で、職場での仕事のしかたに影響を及ぼすことを示唆していた。ビジネスパーソンの個人的な経験論と決定的にずれるポイントであった。

第 2 節 10 年トランジション調査に向けて

京都大学と電通育英会で実施している「大学生のキャリア意識調査」は、全国の大学生を対象に、2007 年以來 3 年おきに 3 回大きく実施してきた（2007 年・2010 年・2013 年）。その間に、いくつかの個別の課題に焦点を当てた調査もおこなってきた。追跡調査も 2 度おこなった。公開はできないものの、同様の質問票を用いて、個別大学・学部での調査もかなりおこなってきた。そして、これらの調査からは、大学生の学びと成長に、

- ・主体的に学ぶ力（教室外学習、主体的な学習態度）
- ・豊かな対人関係や活動性
- ・キャリア意識（二つのライフ）

の活動や意識が関わっているという結果が、ある程度一貫して示されてきた。そして、このような活動や意識が、調査対象者や振り返り式の調査であることなど、調査の限界はありながらも、卒業後の職場での仕事のしかたに影響を及ぼしている結果も示された。

今後、もっとデータを集めて、上記の知見の一般化を確固たるものにしていくことは、

継続してなされるべき重要な作業である。他方で、同一参加者のパネルデータを縦断的に収集して、上記の知見がパネルデータからどの程度一般的に言えるかを示すことが、喫緊の課題として突きつけられるようになっていた。とくに、主体的に学ぶ力（教室外学習、主体的な学習態度）や豊かな対人関係や活動性を、18、19歳にもなった大学生を相手に、一から育てられるとは考えにくいこと、大学生のなかでキャリア意識（二つのライフ）の高い者の多くは、中学生以前から、あるいは高校1・2年生頃から将来のことを考え始めたことと回答する結果が出ていたこと（保田・溝上, 2014）、この2点をふまえて、パネル調査は、せめて高校生から始めて、大学卒業後3年くらいまで、およそ10年かけて実施されなければならないと考えられるようになっていた（以後「10年トランジション調査」）。どのような学習・生活をして、どの程度のキャリア意識を持つ高校生が、どのような大学生になって、そして、大学を卒業後どのようなビジネスパーソンになるのか、どのような社会生活を送っているのか、この関連や構造を明らかにするパネル調査である^{注3}。

幸い、学校法人河合塾教育研究開発本部が、この10年トランジション調査に協力してくれることになり、京都大学高等教育研究開発推進センターとの共催事業として実施されることとなった。高校・大学と併せて70名近くの助言者・連携協力者、全国の教育委員会、約400校の高校の協力も得て、全国調査が2013年10月から12月にかけて実施されることとなった。概要は、次節で示すとおりである。

第3節 10年トランジション調査の概要

(1) 調査名

「学校と社会をつなぐ調査」（通称「10年トランジション調査」）

(2) 実施機関

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター（役割：調査企画や分析等）
- ・学校法人 河合塾教育研究開発本部（役割：調査実施や事務管理等）

(3) 目的

高校2年生から約10年の追跡調査をおこない、学校での学習や日常生活の過ごし方が、大学での学びや社会に出てからの仕事や人生の過ごし方にどのような影響を及ぼすかを検討する。

(4) 調査票

作成の手続き 「大学生のキャリア意識調査」（第1節）ほか、大学で実施されてきた各種調査票を参考にして、筆者が高校2年生用の調査票をたたき台として作成・提案し、高校・教育委員会の教員・関係者と数回の議論を経て、巻末資料B（高校2年生を対象）に示す

^{注3} 「学校から仕事へのトランジション（school-to-work transition）」という概念は、高校卒業者や中退者に関して、あるいはフリーター、ニートなど社会的弱者に関して、世界的にかなりの研究蓄積がある。しかしながら、大学卒業者を対象にした研究や、大学卒業後から初期キャリアまでを対象としたトランジション研究は、ほとんどなされていない。このあたりの学術的整理は、溝上（2014b）でおこなっているので、興味のある方は参照されたい。

調査票が仕上げられた。下記に、質問番号に合わせて、大きな質問内容を記す。

- ・問1 性、学科、中高一貫校、SSH 経験など（5 項目）
- ・問2 学校や日々の生活（16 項目）
- ・問3 部活動と学習との両立、アクティブラーニングの取り組み、生活の充実感（4 項目）
- ・問4 一週間の活動時間（平日・休日それぞれ 12 項目）
- ・問5 友だち関係（9 項目）
- ・問6 技能・態度の獲得（18 項目）
- ・問7 自尊感情（6 項目）
- ・問8 キャリア意識（9 項目）
- ・問9 進学や将来の職業、生き方について考える機会（3 項目）

質問項目の説明 調査票作成時にかなり議論と検討をした以下 2 問についてのみ、説明をしておく。

①問4 一週間の活動時間 大学生では、一週間の活動のタイプによって、学生の学びと成長が部分的に説明される（溝上, 2009, 2012）。この成果を受けて、高校生を対象とする本調査においても一週間の活動を尋ねること、一週間の活動を生徒タイプの作成時（第 2 章）の基本変数とすること、が調査前から計画されていた。しかし、尋ね方については、大学生調査と違って、以下 2 点の大きな改訂をしたので、それをここで説明しておく^{注4}。

第一に、一週間の活動時間数を直接数字で記入させたことである。「大学生のキャリア意識調査」だけでなく、山田編（2009）で示される JCSS も含めて、大学生調査における一週間の活動項目は、以下のような 8 段階評定で尋ねられるのが一般的であった。

(1)全然ない (2)1 時間未満 (3)1-2 時間 (4)3-5 時間 (5)6-10 時間 (6)11-15 時間
(7)16-20 時間 (8)21 時間以上

ご覧の通り、順位尺度にはなっていない点も、間隔尺度以上のものになっていない点が問題である。とくに、大学生調査のなかでは、一週間の活動項目のなかに授業学習や授業外学習が含まれるのが一般的であり、昨今中教審で示される学習時間の問題をしっかりと検討していくためにも、（時間数を直接記入させた）比率尺度にして、学修の平均時間を計算できるようにしておくほうが望ましいことは言うまでもないことである。

ところが、時間数を記入させると、分析上の問題は格段に軽減するが、生徒に回答の負担を過度にかけることになり、回答の質が悪くなるのではないかと懸念された。具体的には、巻末資料 B に示すように、一週間の活動として「部活動」～「睡眠」まで 9 項目、それに「その他」の自由項目を 3 つ加えて、計 12 項目設定していたが、いい加減に数字を書き込んで、すべての活動時間を合計したときに、24 時間をはるかに超える生徒が出てくる

^{注4} 「大学生のキャリア意識調査」でも、2013 年度の調査票からは、ここで示す第一の点と同じく、時間の直接記入の方式に変更している。

かもしれないと考えられたのである。この問題は、実は上述の(1) 全然ない～(8) 21 時間以上で評定されるこれまでの大学生調査においても、生じていた問題ではあったが、時間数の四則計算が適切になされるようになる今回の調査票においては、より露骨に問題化したと言える。この問題に対処するために、調査票では、すべての活動項目の時間数を合計して 24 時間になることを確認させて、そうして表を仕上げるという方式を採ることとした。しかしながら、第 1 回目の予備調査で、ある高校の生徒のほとんどはこの項目自体を回答せず飛ばし、もう 1 つの高校の生徒は、まじめに回答して計算もしてくれたが、「面倒くさい」「これはやってられない」というコメントを残したのであった。

結局、合計して 24 時間になることを確認させる方式は取りやめ、得られたデータに一定の条件を当てはめて分析をおこなうことで、また、記入箇所の下に

*縦の合計が、学校での授業時間（7～8 時間）を含めて 24 時間を越えないように注意してください。

と注意書きを入れることで、この問題に対処することとした。

第二に、(1) 平日（月～金曜日）と(2) 休日（土・日曜日）とを分けて尋ねたことである。これも、「大学生のキャリア意識調査」をはじめとする大学生調査にも当てはまる、共通の問題である。大学生調査では、「一週間の平均的な時間数を記入して下さい」という注意書きを入れて、学生に平均的な時間数を回答させてきたのであった。

高校・教育委員会の教員・関係者との議論のなかで、平日と休日とを分けて尋ねるべきだとの議論が優勢であり、最終的には、巻末資料 B に示すように、(1) 平日と(2) 休日とを分けて尋ねることとした。また、平日でも曜日によって過ごし方の異なることへの配慮が必要だとの意見が多く、

*曜日によって過ごし方は異なると思いますが（たとえば、部活動は週 2 回で、部活動のある曜日とない曜日とでは過ごし方が異なる場合）、あなたを理解するためのもっとも典型的な過ごし方を教えてください（たとえば、部活動があなたにとって重要であれば、部活動のある日の一般的な過ごし方を記入する、など）。

という注意書きも加えて質問をおこなった^{注5}。

②問 7 自尊感情 自尊感情は、日本も含めて世界的に Rosenberg (1965) の尺度（本調査では、櫻井訳 [1997] を使用している）がもっとも多く使用されてきており、項目も 10 項

^{注5} 調査実施後にデータを分析した結果からは、たしかに平日と休日とでは、活動の時間数はまったく異なるものであったが、活動パターン（部活動ばかりか、勉学と部活動を両立しているか、ゲームばかりしているか等）の観点からは、平日と休日とをどうしても分けなければならないという結果は見られなかった。つまり、平日に部活動ばかりする生徒は休日もそうであり、平日に勉学と部活動を両立させている生徒は、休日においてもそうである、といった結果だったのである。この点補足しておく。

目と少なく、定評のある心理尺度である。しかしながら、10項目のなかに、調査に回答する生徒に負の影響が懸念される4項目があり、高校・教育委員会の教員・関係者との協議の結果、削除して調査実施することとした。

筆者の所有する大学生データ（ $n=492$ 、平均年齢 19.72 [SD=1.27]）では、Rosenbergの10項目尺度得点と以下4項目を除いた6項目の尺度得点とのピアソンの積率相関係数は $r=.942$ であり、最終的には、4項目削除に大きな問題はないと判断した。

- ・私は、自分がだめな人間だと思う。
- ・私は、自分が役立たずだと感じる。
- ・私は自分が、少なくとも他人ぐらいは価値のある人間だと思う。
- ・自分を失敗者だと思いがちである。

(5) 調査の実施

大学進学率約7～8割の高校（河合塾の資料より全国約1,500校の生徒を対象）を調査対象の母集団として設定し、全国都道府県の教育委員会、高校に協力を要請して実施。教室での配布、インターネット、郵送等で、165,687名の高校生2年生に調査票への回答を求め、結果、45,311名が回答（27.6%回答率）。2013（平成25）年10～12月に実施された。

なお、予備調査は2段階でおこなわれた。第1段階は、2013年6月に、千葉県私立高校と神奈川県立高校の2校に依頼して、高校2年生を対象に実施された。第2段階は、2013年7月に、北海道の県立高校1校に依頼をし、同様に高校2年生を対象に実施された。本調査で使用した調査票は、以上の2段階の予備調査を経て仕上げられたものである。

(6) 調査実施の流れ



引用文献

溝上慎一（2009）. 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討ー正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示すー 京都大学高等教育研究, 15, 107-118.

- 溝上慎一 (2012). 学生の学びと成長 京都大学高等教育研究開発推進センター (編) 生成する大学教育学 ナカニシヤ出版 pp.119-145.
- 溝上慎一 (2014a). アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂 印刷中
- 溝上慎一 (2014b). 学校から仕事へのトランジションとは 溝上慎一・松下佳代 (編) 高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育— ナカニシヤ出版 pp.1-39.
- 中原淳・溝上慎一 (編) (2014). 活躍する組織人の探究—大学から企業へのトランジション— 東京大学出版会
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- 桜井茂男 (1997). 現代に生きる若者たちの心理—嗜癖・性格・動機づけ— 風間書房
- 高橋哲也・深野政之・溝上慎一 (2014). 大阪府立大学の IR の取組 2—学生調査と教務データの活用— 京都大学高等教育研究開発推進センター主催『第 20 回大学教育研究フォーラム発表論文集』 pp.34-35.
- 山田礼子 (編) (2009). 大学教育を科学する—学生の教育評価の国際比較— 東信堂
- 保田江美・溝上慎一 (2014). 初期キャリア以降の探求—「大学時代のキャリア見通し」と「企業におけるキャリアとパフォーマンス」を中心に 中原淳・溝上慎一編 活躍する組織人の探究—大学から企業へのトランジション— 東京大学出版会 pp.139-173.

第2章 生徒タイプの分析から見えてくる高校生の特徴

溝上慎一（京都大学）

はじめに

1 時点目（高校2年生）から2 時点（大学1年生）への影響については、カテゴリーや変数を用いての関連や構造分析になると考えられるが、本章では、キャリア意識に結びつく高校生の経験（学習や活動、友だち関係・自尊感情など）がいかなるものかを、一括して「生徒タイプ」として示すべく分析をおこなう。キャリア意識に関連させて生徒タイプをつくる理由は、**第1章**で述べたとおり、それが大学生の学びと成長、ひいては大学での経験と職場での仕事のしかたに影響を及ぼす意識だと考えられるからである。筆者の知る限り、キャリア意識は、高校生対象の調査でほとんど尋ねられてこなかったものであり、言い換えれば、高大接続あるいは10年トランジション調査であるからこそ、尋ねられた質問であると言える。

なお、生徒タイプを作る際の条件として、

条件1 一週間の活動を基礎とすること

条件2 条件1をもとに、可能ならキャリア意識に差が出てくるような生徒タイプを作ること

条件3 条件1・2をもとに、可能なら、高校教育の現場から重要だと聞いてきた活動（たとえば、部活動や学校行事への参加）、さらには、社会から求められる活動や意識（ボランティア活動や将来海外で仕事をしたいか等）において、得点差が見られるような生徒タイプを作ること

を考えた。一般的な分析の観点からすると、この工夫は、生徒タイプを抽出するための変数を多くしてしまい、美しくない手続きとも受け取られがちである。しかしながら、実践的には、一目でキャリア意識に直結するある生徒タイプを示し、同時に、他の活動や意識（たとえば、部活動や学校行事への参加）、社会的に求められる活動や意識（ボランティア活動や将来海外で仕事をしたいか等）の得点を知ることができて、クロス集計を重ねて知見をまとめて理解するよりはるかに有用である。

以下では、分析上の問題を承知しつつ実践的有用性を優先させて、生徒タイプを抽出し、他の変数との関係から、抽出された生徒タイプの特徴を明らかにしていく。そして、その結果をふまえた、2 時点目（大学1年生）に向けての仮説を立てる。

第1節 生徒タイプの作成

(1) タイプ作成にあたってのデータ整理

一週間の活動時間について 一週間の活動時間（問4）合計の平均（SD）は、**図表1**に示すように、(1) 平日で12.8h (3.3)、(2) 休日で18.5h (5.7)であった。平日には授業が7~8h

あることと、睡眠で5~8h くらい取ることを考えると、休日がやや長めに記入されているということはあるものの、全体的には大きな問題のないデータが収集されたと言える。

しかし、**第1章第3節(4)**で述べたように、活動時間の合計が極端に長すぎる者、短すぎる者、記入のない者がいるので、それらを除外したデータセットを作る必要がある。ただ、できるだけ多くのサンプルを残したい意図もあるし、記入の時間自体が厳密な数字でないこともふまえて、ゆるやかに以下の基準すべてに合致するサンプルを分析対象として、それ以外を除外することとした。この基準値には、上述の授業時間（平日）、睡眠（平日・休日）が考慮されている。言うまでもなく、基準値をどこに採るかは複数の選択肢があり得るので、以下では、この基準値の下で分析が進められたと理解して欲しい。基準値のいずれかに合致しないサンプルを除外すると、分析対象として残ったサンプルは、収集サンプルの86.5%である39,210人（男子18,601人、女子19,914人、答えたくない/未記入695名）であった。

基準1：平日の活動時間の合計が5.5~20.0時間であり、休日の活動時間の合計が5.5~25.0時間であること。

基準2：睡眠時間が3時間以上。

図表1 一週間の活動時間の合計・平均

時間(h)	平日	休日
0.0	850 (1.9)	1,327 (2.9)
0.5-5.0	218 (0.5)	143 (0.3)
5.5-10.0	3,069 (6.8)	655 (1.4)
10.5-15.0	31,556 (69.6)	5,934 (13.1)
15.5-20.0	8,618 (19.0)	19,299 (42.6)
20.5-25.0	790 (1.7)	14,116 (31.2)
25.5-30.0	149 (0.3)	2,780 (6.1)
30.5-35.0	38 (0.1)	727 (1.6)
35.5-40.0	13 (0.0)	222 (0.5)
40.5-45.0	4 (0.0)	72 (0.2)
45.5-50.0	3 (0.0)	21 (0.0)
50.5-55.0	2 (0.0)	12 (0.0)
55.5-60.0	1 (0.0)	3 (0.0)
合計	45,311 (100.0)	45,311 (100.0)
平均h(SD)	12.8h (3.3)	18.5h (5.7)

進学・就職について 本調査は、基本的に、高校卒業後大学に進学して、大学を卒業後3年までの約10年間を追跡する調査である。しかし、大学進学率約7~8割の高校を調査対象として調査を実施したことから、**図表2**に見られるように、約4%の者は「就職する」「就職も進学もしない」「まだわからない」「その他」の回答となっている。また、「進学する」の95.5%の者のなかには、短大や専門学校など、大学以外の進学者も含まれている。

本章では、生徒タイプを作成するにあたって、この「(大学、短大、専門学校などに)進

学する」と回答した者 37,448 名 (95.5%) を分析対象として抽出する。以下の考察や解釈等では、記述が冗長になることを避けるために、分析対象者がすべて大学進学者であるかのように記述されることもあるが、実際には、そのなかに短大や専門学校などへの進学者が含まれていることに留意されたい。

図表 2 高校卒業後の進学・就職予定

1 (大学、短大、専門学校などに)進学する	37,448 (95.5)
2 就職する	537 (1.4)
3 就職も進学もしない	25 (0.1)
4 まだわからない	1,006 (2.6)
5 その他	31 (0.1)
未回答	163 (0.4)
計	39,210 (100.0)

友だち関係・自尊感情の項目について 調査では、友だち関係 (問 5) の項目を 9 項目、自尊感情は Rosenberg (1965) の尺度 (問 7) 10 項目 (櫻井, 1997 訳) を尋ねている。ここでは、生徒タイプを作成するにあたって、友だち関係項目については、因子分析をおこなって、因子寄与率のもっとも高い項目を、自尊感情項目については、全体の尺度得点ともっとも相関の高い項目を抽出することにした。自尊感情については、尺度得点を 1 項目と見なし分析を進める方法も可能であったが、生徒タイプに使用する他の項目が尺度項目でないことを受けて、その方法を採らなかった。

友だち関係項目について、因子分析 (最尤法・プロマックス回転) をおこない、固有値の減衰状況 (2.484、1.274、1.084) から 3 因子に分かれると考えられ (説明率 35.2%)、それぞれの因子にもっとも高く寄与している下記の 3 項目 (因子順) を抽出した。生徒タイプの作成には、この 3 項目を使用していくこととした。

問 5(2) 初対面の人とでもすぐ友だちになる

問 5(8) 悩み語いとなど相談できる友だちがいる

問 5(3) 友だちというより、ひとりであるほうが気持ちが落ち着く

自尊感情項目については、問 7 の(4)(5)の逆転処理をおこない、6 項目のクロンバックの α 係数を求めたところ、 $\alpha = .691$ が得られた。やや低い値であったが、問題のない値として分析を進めた。合計得点と各項目の相関係数を見て、もっとも全体得点と相関の高い下記の項目を抽出して、生徒タイプの分析に使用していくこととした。

問 7(2) 私が、自分には見どころがあると思う

(2) 生徒タイプの作成

(1) で抽出した 37,448 名の高校生を、非階層クラスタ分析 (k-means 法) によって、いくつかの生徒タイプに分類する作業をおこなった。クラスタ分析で生徒タイプを作成するときの条件は、**はじめに**で述べたように、

条件 1 一週間の活動を基礎とすること

条件2 条件1をもとに、可能ならキャリア意識に差が出てくるような生徒タイプを作ること

条件3 条件1・2をもとに、可能なら、高校教育の現場から重要だと聞いてきた活動（たとえば、部活動や学校行事への参加）、さらには、社会から求められる活動や意識（ボランティア活動や将来海外で仕事をしたいか等）において、得点差が見られるような生徒タイプを作ること

の3点であった。このポイントをにらんで使用したのが、以下の項目群である（生徒タイプ作成の条件1～3にしたがって、項目を並び替えている）。

- ・問4 一週間の活動時間（平日・休日それぞれ12項目）
 - *自由に記入する活動項目「その他1」～「その他3」については、記入者数が平日6.6%、休日6.9%だったので、分析が複雑になることを避けて、分析項目からは除外した。
- ・問8 キャリア意識（3項目）
 - *項目(3A)(3B)(4)を使用した。これらの項目は、得点を逆転処理して分析に使用した。なお、これらの項目は、本分析の対象となっている「(大学、短大、専門学校などに進学する」と回答した者のみが回答する選択項目である。
- ・問2 学校や日々の生活（13項目）
 - *項目(8)～(10)は(7)「私は、授業の内容を理解している」で代表できると考え、分析項目から除外した。
- ・問5 友だち関係（3項目）
 - *前項(1)で説明したように、項目(2)(8)(3)を抽出した。なお、項目(2)(8)は肯定項目で、(3)は否定項目なので、分析にはこの順で使用した。
- ・問7 自尊感情（1項目）
 - *前項(1)で説明したように、項目(2)を抽出した。

項目の得点はスケールが異なるため、すべて標準化処理をおこない、標準化得点を用いて非階層クラスタ分析（K-means法）をおこなった。手続きは、大きく2段階でおこなわれた。

第1に、4～8のクラスタ数でクラスタ分析を実施し、それぞれ得られたクラスタの特徴を見て、解釈のしやすいクラスタ数を仮に決定するという手続きである。クラスタ数は、教育現場の生徒を理解していくための数でもある。少なすぎるとは、生徒を単純に理解しすぎることになるし、多すぎるとは、細かく理解しすぎることになり、実際に教育や指導に活かしにくいことになる。ここでは、これらの間の数として4～8で検討することが妥当であると考えられた。

第2に、解釈のしやすいクラスタ数がおおよそ定まってくれば、クラスタを独立変数、項目得点を従属変数とする一要因分散分析をおこない、1%水準の有意差、かつ中程度の効果量（ η^2 ）が得られた項目のみを残し、再度クラスタ分析をおこない、再度得られたクラ

スタの特徴を解釈する、という手続きである。これは、分析に使用する項目数を、最終的にできるだけ減らすためである。もっとも項目数が少なくなり、十分に特徴が解釈されるクラスタを得るまで、この手続きを繰り返す。

こうして、最終的に採用されたクラスタ数は 7 であった。生徒タイプを作る際に設定した条件 1（一週間の活動を基礎とすること）は、結果として、大学生だけでなく、高校生にもうまく当てはまり、7つのクラスタは基本的に一週間の活動時間によって分類されることが明らかとなった。その上で、条件 2、条件 3 もうまく考慮して、項目が最終決定されている。

(3) 生徒タイプの命名と特徴

各クラスタは、項目の得点から解釈して、「勉強タイプ」「勉強ほどほどタイプ」「部活動タイプ」「交友通信タイプ」「読書マンガ傾向タイプ」「ゲーム傾向タイプ」「行事不参加タイプ」と命名された（**図表 3** 参照）。ここから先、クラスタを「(生徒)タイプ」と呼んで使用していく。以下、それぞれの生徒タイプの特徴を説明していく。

①**勉強タイプ** 他の生徒に比べて、「授業以外の学習時間」が長いこと（平均時間は平日 2.73h、休日 4.47h）を特徴として分類されるタイプである。このタイプのなかには、部活動と両立している者も多く含まれている。当然、「授業の内容を理解している」の得点は高いが、そのほかにも「規則正しい生活を送っている」、「将来海外の大学や学校に行きたい」、「将来海外で仕事をしたい」、「自分に見どころがあると思う」（自尊感情）、「進学先についてよく考えている」（キャリア意識）、「進学準備を始めている」（キャリア意識）、「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」（キャリア意識）の得点が、他の生徒に比べて高い。概して、よく学び、将来に向けて頑張り、個人の成長を実感している生徒タイプであると言えよう。

②**勉強ほどほどタイプ** 「授業以外の学習時間」が長いことを特徴として分類されるタイプであるが、勉強タイプより「授業以外の学習時間」がやや短い（平均時間は平日 1.85h、休日 2.82h）。「ボランティア活動に参加してきた」は、他の生徒に比べてもっとも得点が高い。勉強タイプが高い得点を示した「授業の内容を理解している」、「規則正しい生活を送っている」、「将来海外の大学や学校に行きたい」、「将来海外で仕事をしたい」、「自分に見どころがあると思う」（自尊感情）、「進学先についてよく考えている」（キャリア意識）、「進学準備を始めている」（キャリア意識）、「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」（キャリア意識）の項目については、おおむね勉強タイプに次いで高い得点を示している。**図表 3** では、平日・休日の「読書をする（マンガ・雑誌を除く）」時間が、読書マンガ傾向タイプに次いで長く見えるが、平均時間を算出すると、平日 0.89h、休日 1.45h であり、そこまで長いと言えるほどのものではない。得点を標準化して分析していることから生じている結果であると考えられる。概して、準勉強タイプとでも呼ぶべきタイプであると言えよう。

③**部活動タイプ** 他の生徒に比べて、「部活動」の時間が長いこと（平均時間は平日 2.63h、

休日は 4.78h) を特徴として分類されるタイプである。全体のなかで「授業以外の学習時間」が比較的短く、勉強タイプのなかに部活動と両立している者が多く含まれていることを併せて考えると、部活動をやりながら勉強をあまりしない生徒の多くが、この部活動タイプに分類されていると考えられる。「学校行事に積極的に参加する」、「悩み事を相談する友だちがいる」(友だち関係) は比較的得点が高いが、「進学先についてよく考えている」(キャリア意識)、「進学準備を始めている」(キャリア意識)、「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」(キャリア意識) の得点はかなり低い。概して、部活動を中心に高校生活を過ごし、良好な友だち関係や集団行動には適応しているが、勉強はあまりやらず、将来のこともあまり考えていないタイプであると言えよう。

④交友通信タイプ 他の生徒に比べて、「友だちと遊ぶ」(平均時間は平日 0.56h、休日 3.28h)、「友だちと電話・LINE・メール交換、ツイッター・SNS など」(平均時間は平日 1.40h、休日 2.28h) の時間が長いことを特徴として分類されるタイプである。全体のなかで「授業以外の学習時間」が比較的短い、「学校行事に積極的に参加する」、「初対面の人とすぐ友だちになる」(友だち関係)、「悩み事を相談する友だちがいる」(友だち関係) の得点は全体のなかでもっとも高い。また、「進学準備を始めている」(キャリア意識) の得点はあまり高くないながらも、「進学先についてよく考えている」(キャリア意識)、「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」(キャリア意識) の得点は、勉強タイプ、勉強ほどタイプに次いで高い得点を示す。概して、友だちと遊んだり通信したりすることが高校生活の中心であり、良好な友だち関係を築いていたり集団行動に適応していたりする。勉強はあまりしないが、将来のことは比較的よく考えているタイプであると言えよう。

⑤読書マンガ傾向タイプ 他の生徒に比べて、「読書をする(マンガ・雑誌を除く)」(平均時間は平日 1.98h、休日 3.05h)、「マンガ・雑誌を読む」(平均時間は平日 0.51h、休日 0.79h) 時間が長いことを特徴として分類されるタイプである。全体のなかで、「ひとりであるほうが気持ちが落ち着く」(友だち関係) の得点がもっとも高く、ほか、「規則正しい生活を送っている」、「将来海外の大学や学校に行きたい」、「将来海外で仕事をしたい」、「悩み事を相談する友だちがいる」(友だち関係)、「自分に見どころがあると思う」(自尊感情)、「進学先についてよく考えている」(キャリア意識)、「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」(キャリア意識) の得点が低い。概して、読書したりマンガ・雑誌を読んだりして、ひとりで過ごすことが多く、友だち関係は弱く、自尊感情、キャリア意識は低いタイプであると言えよう。

⑥ゲーム傾向タイプ 他の生徒に比べて、「ゲームをする」時間が長いこと(平均時間は平日 2.07h、休日 3.40h) を特徴として分類されるタイプである。全体のなかで、「規則正しい生活を送っている」、「授業の内容を理解している」、「進学先についてよく考えている」(キャリア意識)、「進学準備を始めている」(キャリア意識) の得点がもっとも低い。ほか、「ひとりであるほうが気持ちが落ち着く」(友だち関係) の得点が高く、「将来海外の大学や学

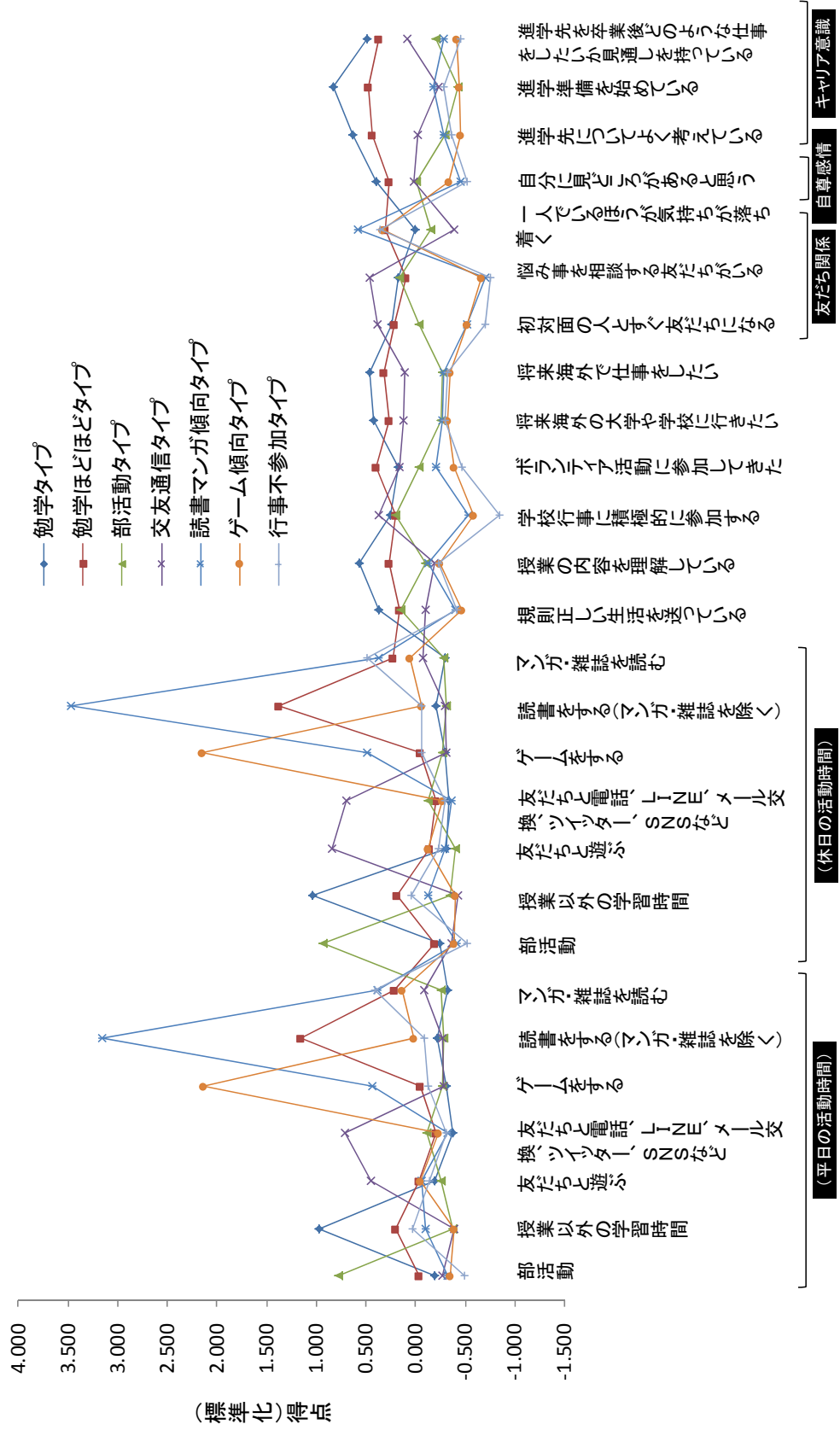
校に行きたい」、「将来海外で仕事をしたい」、「悩み事を相談する友だちがいる」（友だち関係）、「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」（キャリア意識）の得点が低い。概して、ゲームをしてひとりで過ごすことが多く、勉強はしない、友だち関係は弱い、キャリア意識も低いタイプであると言えよう。

⑦行事不参加タイプ 他の生徒に比べて、「学校行事に積極的に参加する」の得点がもっとも低いことを特徴として分類されるタイプである。7つの生徒タイプのなかで唯一、一週間の活動以外の項目で分類されるタイプであるが、高校教育の現場で学校行事への参加が重要だと言われることが多いことを理由に、このタイプをあえて抽出した。全体のなかで、「部活動」の時間がもっとも短く、「ボランティア活動に参加してきた」、「初対面の人とすぐ友だちになる」（友だち関係）、「悩み事を相談する友だちがいる」（友だち関係）、「自分に見どころがある」（自尊感情）、「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」（キャリア意識）の得点がもっとも低い。ほか、「授業の内容を理解している」、「将来海外の大学や学校に行きたい」、「将来海外で仕事をしたい」、「進学先についてよく考えている」、「進学準備を始めている」の得点が低い。概して、友だち関係が弱く、自尊感情の低いことが学校行事への消極的参加につながっていると考えられ、将来のことも考えられていないタイプであると言えよう。

以下 2 点は、調査実施前に予想していたことが、分析結果からは見いだせなかったことである。

第 1 に、平日と休日の活動パターンは、当初予想されたほど大きな差を示すものではなかったことである。たしかに平日と休日とでは、活動の時間数はまったく異なるものであったが、上記で示してきたように、生徒タイプの観点からは、たとえば勉学タイプの生徒は他の生徒に比べて、平日も休日もよく「授業以外の学習」をおこない、部活動タイプは他の生徒に比べて、平日も休日もよく「部活動」をおこなっていたのであった。

第 2 に、勉学と部活動との両立タイプは抽出されなかったことである。両立タイプの分析をおこなった**図表 12**の結果を先取って参考にして言えば、勉学（ここでは「授業以外の学習時間」）をしながら部活動もする生徒（まさに勉学と部活動の両立タイプ）の多くは、上述のとおり、「勉学タイプ」に分類されており、部活動が一週間の活動の中心であり、かつ勉学をあまりしない者の多くは、「部活動タイプ」に分類されている。勉学と部活動との両立の意味については、後に別途検討することとする。



図表3 クラスタ分析 (k-means 法) による生徒7タイプ

(4) 男女別に見た生徒タイプの割合

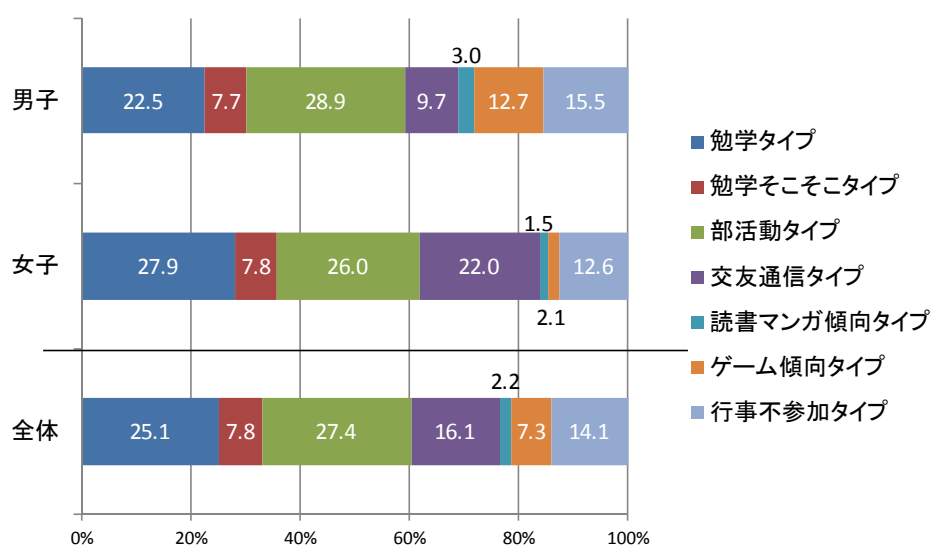
男女別に見た生徒タイプの割合を、**図表 4** に示す。それを見ると、「交友通信タイプ」は女子（22.0%）のほうが男子よりも多く、「ゲーム傾向タイプ」は男子（12.7%）のほうが女子よりも多かった。そのほかのタイプは、大きな男女差は見られなかった。

図表 4 男女別に見た生徒 7 タイプの割合

数字：人数（%）

	勉学タイプ	勉学 そこそこタイプ	部活動タイプ	交友通信 タイプ	読書マンガ 傾向タイプ	ゲーム傾向 タイプ	行事不参加 タイプ	全体
男子	3,742 (22.5)	1,275 (7.7)	4,802 (28.9)	1,610 (9.7)	490 (3.0)	2,107 (12.7)	2,580 (15.5)	16,606 (47.8)
女子	5,048 (27.9)	1,415 (7.8)	4,712 (26.0)	3,981 (22.0)	280 (1.5)	387 (2.1)	2,291 (12.6)	18,114 (52.2)
全体	8,790 (25.1)	2,690 (7.8)	9,514 (27.4)	5,591 (16.1)	770 (2.2)	2,494 (7.3)	4,871 (14.1)	34,720 (100.0)

*全体には性を答えたくない / 未記入の者を含む



第 2 節 生徒タイプに関するその他の分析

ここでは、生徒タイプの技能・態度の獲得との関連、共学・男子校・女子校別、中高一貫別、大学進学グループ別、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の参加別、アクティブラーニングの参加状況別に見た生徒タイプの割合を検討する。

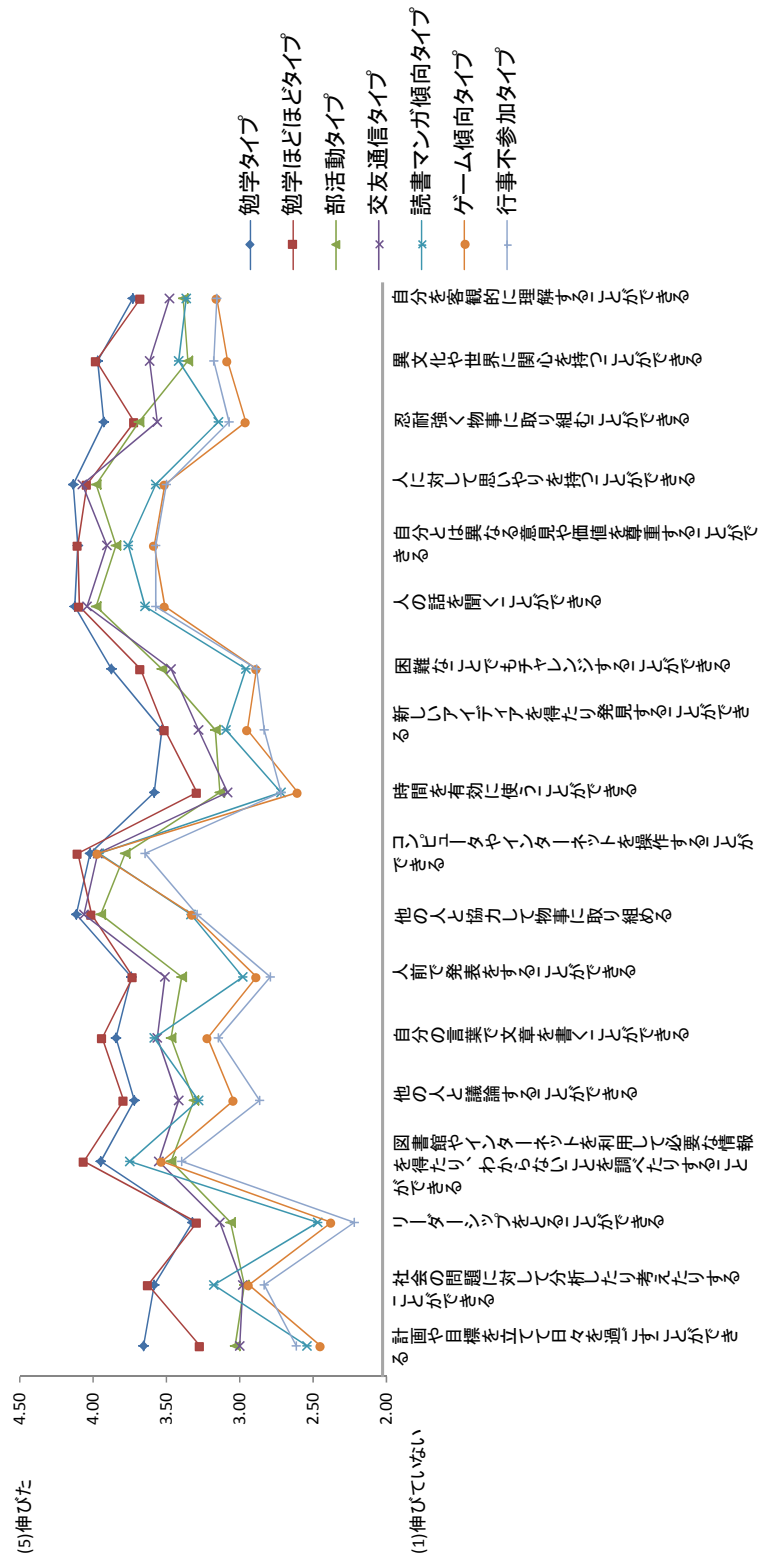
(1) 生徒タイプの技能・態度の獲得との関連

生徒タイプ別に見た技能・獲得の得点を、**図表 5** に示す。それを見ると、全体的に「勉学タイプ」「勉学ほどほどタイプ」の得点が高く、次いで「交友通信タイプ」「部活動タイプ」が中程度の得点を示していた。「交友通信タイプ」「部活動タイプ」は、いずれも友だち関係や集団行動に強いタイプなので、「他の人と協力して物事に取り組める」「人の話を聞くことができる」「人に対して思いやりを持つことができる」といった項目の得点は、「勉学タイプ」「勉学ほどほどタイプ」と同程度の高い得点を示していた。しかし、「他の人と議論することができる」「人前で発表することができる」の得点は、中程度の得点を示していたことから、これらの活動は学習と関連した技能・態度だと考えることもできる。

全体的に得点が低かったのは、「行事不参加タイプ」「ゲーム傾向タイプ」であった。加

図表 5 生徒タイプの技能・態度の獲得との関連

生徒タイプ	計画や目標を立てて日々を過ごすことができる	社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる	リーディングをとることができる	図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たり、わからないことを調べたりすることができる	他の人と議論することができる	自分の言葉で文章を書くことができる	人前で発表することができる	他の人と協力して物事に取り組める	コンピュータやインターネットを操作することができる	コンピュータやインターネットを使うことができる	時間を有効に使うことができる	新しいアイデアを得たり発見することができる	困難なことでもまよひしないことができる	人話や人の話を聞くことができる	自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	人に対して思いやりを持つことができる	忍耐強く物事に取り組むことができる	異文化や世界に関心を持つことができる	自分を客観的に理解することができる
勉学タイプ	3.65	3.58	3.32	3.94	3.72	3.84	3.73	4.11	4.02	3.58	3.87	3.52	3.87	4.12	4.13	3.93	3.97	3.73	
勉学ほどほどタイプ	3.27	3.62	3.29	4.05	3.79	3.94	3.73	4.00	4.10	3.29	3.67	3.51	3.67	4.08	4.03	3.72	3.97	3.67	
部活動タイプ	3.03	2.97	3.06	3.47	3.31	3.47	3.39	3.94	3.77	3.13	3.52	3.17	3.52	3.98	4.03	3.68	3.35	3.38	
交友通信タイプ	3.00	2.98	3.14	3.55	3.41	3.56	3.51	4.06	3.97	3.08	3.46	3.28	3.46	4.03	4.07	3.56	3.61	3.48	
読書マンガ傾向タイプ	2.54	3.17	2.47	3.75	3.28	3.58	2.98	3.33	3.95	2.71	2.95	3.09	2.95	3.64	3.57	3.14	3.41	3.36	
ゲーム傾向タイプ	2.44	2.94	2.38	3.53	3.04	3.21	2.88	3.32	3.96	2.60	2.88	2.95	2.88	3.51	3.50	2.96	3.08	3.15	
行事不参加タイプ	2.61	2.83	2.22	3.39	2.86	3.14	2.78	3.29	3.65	2.72	2.88	2.83	2.88	3.57	3.49	3.07	3.17	3.15	



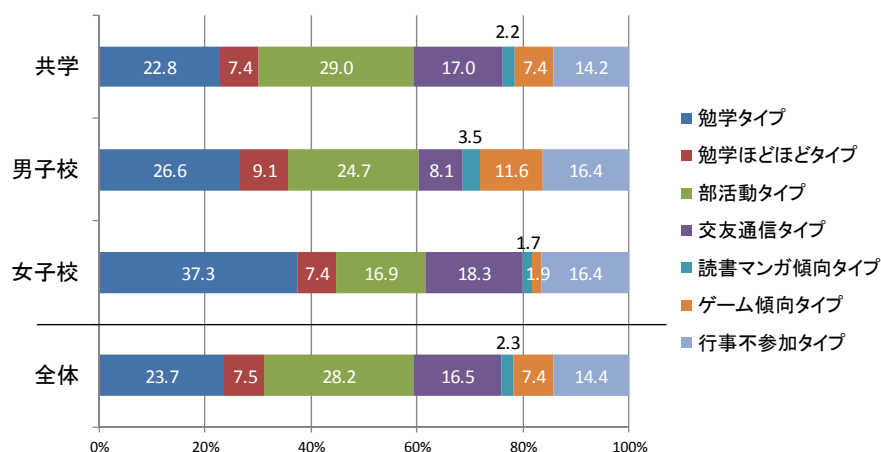
えて、項目によっては中程度の得点を示すが、同様に全体的に得点が低かったのは、「読書マンガ傾向タイプ」であった。これら3つの生徒タイプは、昨今求められる技能や態度（ジェネリックスキルやコンピテンシー、21世紀型スキルなど）の獲得に困難を示す可能性の高いタイプであると考えられる。

(2) 共学・男子校・女子校別に見た生徒タイプの割合

共学・男子校・女子校別に見た生徒タイプの割合を、**図表6**に示す。それを見ると、「勉強タイプ」は女子校で多く見られ（37.3%）、「ゲーム傾向タイプ」は男子校で多く見られた（11.6%）。逆に少なかったのは、女子校の「部活動タイプ」（16.9%）と男子校の「交友通信タイプ」（8.1%）であった。「行事不参加タイプ」は、共学、男子校、女子校いずれにおいても、約15%前後の割合を示していた。

図表6 共学・男子校・女子校別に見た生徒タイプの割合 数字：人数（%）

	勉強タイプ	勉強 そこそこタイプ	部活動タイプ	交友通信 タイプ	読書マンガ 傾向タイプ	ゲーム傾向 タイプ	行事不参加 タイプ	全体
共学	6,827 (22.8)	2,212 (7.4)	8,691 (29.0)	5,082 (17.0)	662 (2.2)	2,225 (7.4)	4,245 (14.2)	29,944 (100.0)
男子校	534 (26.6)	183 (9.1)	494 (24.7)	162 (8.1)	70 (3.5)	232 (11.6)	329 (16.4)	2,004 (100.0)
女子校	537 (37.3)	107 (7.4)	244 (16.9)	264 (18.3)	25 (1.7)	27 (1.9)	237 (16.4)	1,441 (100.0)
全体	7,898 (23.7)	2,502 (7.5)	9,429 (28.2)	5,508 (16.5)	757 (2.3)	2,484 (7.4)	4,811 (14.4)	33,389 (100.0)

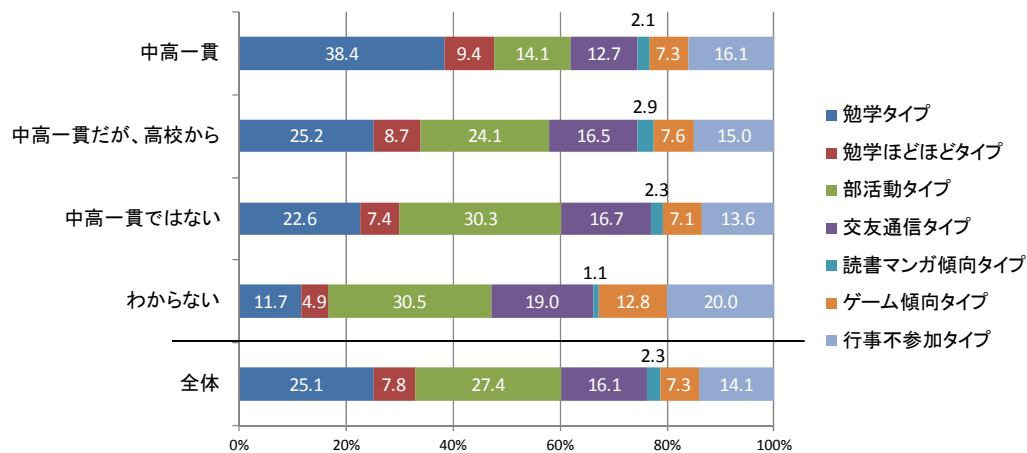


(3) 中高一貫別に見た生徒タイプの割合

中高一貫別に見た生徒タイプの割合を、**図表7**に示す。それを見ると、中高一貫校は、「勉強タイプ」が多く（38.4%）、「部活動タイプ」が少ないという特徴を示していた。それ以外のタイプは、いずれも同程度の割合であった。

図表7 中高一貫別に見た生徒タイプの割合 数字：人数（%）

	勉強タイプ	勉強 そこそこタイプ	部活動タイプ	交友通信 タイプ	読書マンガ 傾向タイプ	ゲーム傾向 タイプ	行事不参加 タイプ	全体
中高一貫	2,085 (38.4)	509 (9.4)	763 (14.1)	690 (12.7)	112 (2.1)	396 (7.3)	872 (16.1)	5,427 (15.4)
中高一貫だが、高校から	670 (25.2)	230 (8.7)	641 (24.1)	438 (16.5)	77 (2.9)	201 (7.6)	399 (15.0)	2,656 (7.6)
中高一貫ではない	6,020 (22.6)	1,964 (7.4)	8,067 (30.3)	4,437 (16.7)	599 (2.3)	1,901 (7.1)	3,606 (13.6)	26,594 (75.7)
わからない	55 (11.7)	23 (4.9)	143 (30.5)	89 (19.0)	5 (1.1)	60 (12.8)	94 (20.0)	469 (1.3)
全体	8,830 (25.1)	2,726 (7.8)	9,614 (27.4)	5,654 (16.1)	793 (2.3)	2,558 (7.3)	4,971 (14.1)	35,146 (100.0)



(4) 大学進学グループ別に見た生徒タイプの割合

河合塾の進学資料を用いて、高校を下記のグループ I・II・III のいずれかに分類した。

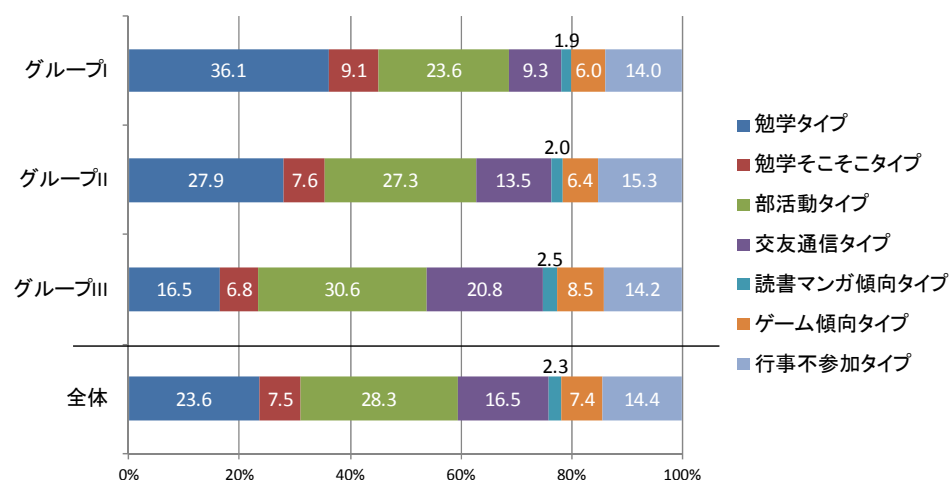
- ・グループ I : 難関国公立大・私立大に多数進学
- ・グループ II : 中堅国公立大・私立大に多数進学
- ・グループ III : その他の私立大・短大等に多数進学

大学進学グループ別に見た生徒タイプの割合を、**図表 8** に示す。それを見ると、「勉強タイプ」は大学進学グループ I で多く見られ (36.1%)、「部活動タイプ」(30.6%)、「交友通信タイプ」(20.8%) は大学進学グループ III で多く見られた。「読書マンガ傾向タイプ」「ゲーム傾向タイプ」「行事不参加タイプ」は、大学進学グループに関係なく、同程度の割合が見られた。

図表 8 大学進学グループ別に見た生徒タイプの割合

数字 : 人数 (%)

	勉強タイプ	勉強 そこそこタイプ	部活動タイプ	交友通信 タイプ	読書マンガ 傾向タイプ	ゲーム傾向 タイプ	行事不参加 タイプ	全体
グループI	2,512 (36.1)	629 (9.1)	1,642 (23.6)	648 (9.3)	133 (1.9)	416 (6.0)	970 (14.0)	6,950 (20.9)
グループII	2,417 (27.9)	661 (7.6)	2,369 (27.3)	1,173 (13.5)	176 (2.0)	557 (6.4)	1,324 (15.3)	8,677 (26.0)
グループIII	2,928 (16.5)	1,205 (6.8)	5,418 (30.6)	3,681 (20.8)	447 (2.5)	1,508 (8.5)	2,507 (14.2)	17,694 (53.1)
全体	7,857 (23.6)	2,495 (7.5)	9,429 (28.3)	5,502 (16.5)	756 (2.3)	2,481 (7.4)	4,801 (14.4)	33,321 (100.0)



(5) SSHの参加状況別に見た生徒タイプの割合

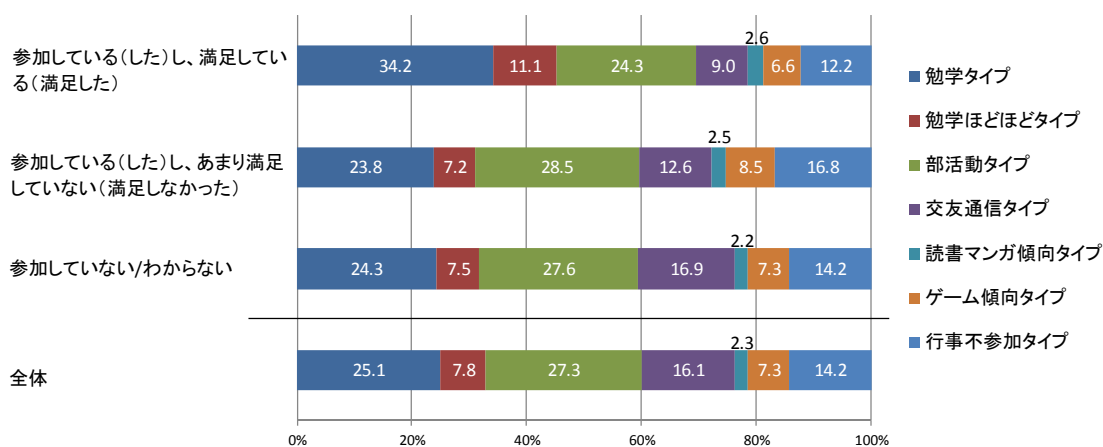
SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の参加状況別に見た生徒タイプの割合を、**図表9**に示す。それを見ると、「(SSHに)参加している(した)し、満足している(満足した)」と回答した者(=SSH参加・満足者)のなかで、「勉強タイプ」の割合が多く(34.2%)、「交友通信タイプ」の割合が少なく見られた(9.0%)。SSHに参加しても、満足していない(しなかった)者(SSH参加・不満足者)を見ると、「勉強タイプ」は、「参加していない/わからない」者(SSH非参加者)とほとんど変わらない割合であった。

周知のとおり、SSHは、文部科学省が科学技術や理科・数学教育を重点的におこなう高校を指定する制度であり、そのプログラムに参加する生徒は、参加しない生徒よりも学習が豊かであるイメージがある。**図表9**の結果からは、たしかに、SSH参加・満足者の「勉強タイプ」は多く見られたが、その割合(34.2%)は、以上で見てきた、たとえば大学進学グループIの36.1%と比べて、格段高い値だとは言えないものであった。むしろ、SSH参加・満足者のなかでも、「行事不参加タイプ」(12.2%)や「ゲーム傾向タイプ」(6.6%)の割合が少なからずいて、その割合がSSH非参加者と比べて同程度であることに驚きを感じるという結果であった。今後、SSHのプログラムの効果検証がなされていくことと思われるし、本調査も2時点目、3時点目と調査を重ねていくので、SSHに参加することの影響を引き続き検討していきたい。

図表9 SSH参加状況別に見た生徒タイプの割合

数字：人数(%)

	勉強タイプ	勉強 そこそこタイプ	部活動タイプ	交友通信 タイプ	読書マンガ 傾向タイプ	ゲーム傾向 タイプ	行事不参加 タイプ	全体
参加している(した)し、満足している(満足した)	1,041 (34.2)	336 (11.1)	739 (24.3)	273 (9.0)	79 (2.6)	202 (6.6)	370 (12.2)	3,040 (8.7)
参加している(した)し、あまり満足していない(満足しなかった)	313 (23.8)	94 (7.2)	374 (28.5)	166 (12.6)	33 (2.5)	112(8.5)	221 (16.8)	1,313 (3.8)
参加していない/わからない	7,437 (24.3)	2,293 (7.5)	8,441 (27.6)	5,179 (16.9)	675 (2.2)	2,228 (7.3)	4,359 (14.2)	30,612 (87.6)
全体	8,791 (25.1)	2,723 (7.8)	9,554 (27.3)	5,618 (16.1)	787 (2.3)	2,542 (7.3)	4,950 (14.2)	34,965 (100.0)



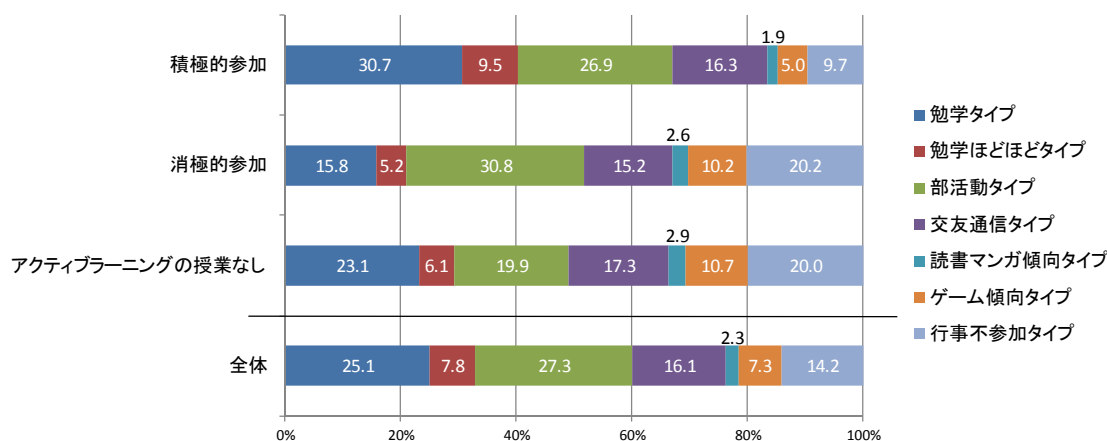
(6) アクティブラーニングの参加状況別に見た生徒タイプの割合

問 3(2)の「授業におけるディスカッション（話し合い）・プレゼンテーション（発表）などに精いっぱい取り組んでいますか」という問いへの回答を、「積極的参加」（取り組んでいる・まあまあ取り組んでいる）、「消極的参加」（あまり取り組んでいない・取り組んでいない）、「アクティブラーニングの授業なし」（そういう授業はない）と整理をして、生徒タイプ別に割合を見たものを、**図表 10**に示す。それを見ると、積極的参加者のなかに「勉学タイプ」が多く（30.7%）、「行事不参加タイプ」（9.7%）が少ないという特徴が見られた。消極的参加とアクティブラーニングの授業なしの者のなかに、「行事不参加タイプ」が多く見られた（それぞれ 20.2%、20.0%）。

図表 10 アクティブラーニングの状況別に見た生徒タイプの割合

数字：人数（%）

	勉学タイプ	勉学 そこそこタイプ	部活動タイプ	交友通信 タイプ	読書マンガ 傾向タイプ	ゲーム傾向 タイプ	行事不参加 タイプ	全体
積極的参加	6,183 (30.7)	1,911 (9.5)	5,412 (26.9)	3,292 (16.3)	390 (1.9)	1,005 (5.0)	1,948 (9.7)	20,141 (57.2)
消極的参加	1,774 (15.8)	584 (5.2)	3,449 (30.8)	1,699 (15.2)	292 (2.6)	1,146(10.2)	2,262 (20.2)	11,206 (31.8)
アクティブラーニングの 授業なし	898 (23.1)	239 (6.1)	773 (19.9)	674 (17.3)	113 (2.9)	417 (10.7)	778 (20.0)	3,892 (11.0)
全体	8,855 (25.1)	2,734 (7.8)	9,634 (27.3)	5,665 (16.1)	795 (2.3)	2,568 (7.3)	4,988 (14.2)	35,239 (100.0)



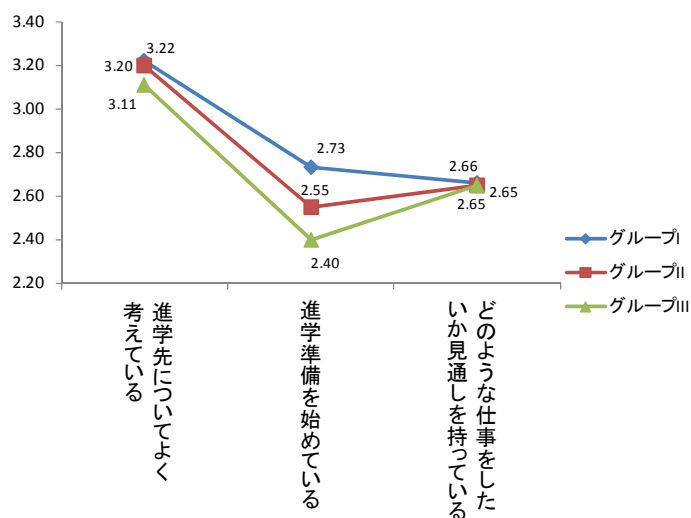
(7) 大学進学グループとキャリア意識との関連

第 1 節 (3)で示した「勉学タイプ」「勉学ほどほどタイプ」の特徴から、授業以外の学習時間とキャリア意識は高い関連を持っていることが示唆されている。「勉学タイプ」は、大学進学グループ I（**前項 (4)**を参照）や SSH 参加・満足者（**前項 (5)**を参照）に多いことから、必然的に、高校の大学進学実績と密接に関連していることが容易に推測される。ここでは、大学進学グループとキャリア意識の 3 項目（「進学先についてよく考えている」「進学準備を始めている」「どのような仕事をしたいか見通しを持っている」）との関連を見て、大学進学グループとキャリア意識との間に関連があるのかを検討しておく。

結果を、**図表 11**に示す。それを見ると、「進学先についてよく考えている」は、大学進学グループ I・II でもっとも高いが（順に 3.22、3.20）、グループ III でも決して低くはな

い(3.11)。むしろ、大学進学グループのⅠ・Ⅱ・Ⅲに差がつくのは、「進学準備を始めている」かどうかである(順に2.73、2.55、2.40)。興味深いのは、「どのような仕事をしたいか見通しを持っている」の得点は、大学進学グループいずれもほとんど差が見られなかった。

以上の結果より、大学進学実績の高い高校の生徒は、進学準備をはやくから始める傾向があること、しかしながら、進学先について考える、将来の仕事を考えることについては、高校の大学進学実績はあまり関係のないことが明らかとなった。



図表 11 大学進学グループとキャリア意識との関連

(8) 部活動と学習との両立との関連

第1節(3)で述べたように、調査実施前には、一週間の活動時間からクラスタ分析によって、勉学と部活動との両立タイプが抽出されると予想していた。しかしながら、分析をおこなった結果、両立タイプは見いだすことができなかった。ここでは、問3(1)の「部活動と学習とを両立させることができますか」の質問項目を用いて、回答を「両立できている」(できている・まあまあできている)、「両立できていない」(あまりできていない・できていない)、「部活動をしていない」(部活動をやっていない)と整理して、上述の生徒タイプとの関連を詳しく検討する。

図表12は、生徒タイプと部活動と学習との両立をクロスさせた表である。部活動と学習との両立には、「両立できている」「両立できていない」「部活動をしていない」の3つの状態があるので、生徒タイプ(7)×部活動と学習との両立(3)で、計21の両立タイプが作成されることになる。部活動タイプに分類されながら、「部活動をしていない」と回答した者が9名いたので、これを欠損値として分析から除外して、結果計20の両立タイプが計算されることになる。分析対象は34,366名である。

図表の右端に、両立タイプそれぞれにおける「授業以外の学習時間」(問4の一週間の活

動時間：平日・休日）の平均時間を記しておく。部活動と学習とを両立できていると回答する者のなかでも、生徒タイプによって、実際の学習時間のかなり異なることが見て取れる。たとえば、両立タイプ1（勉学タイプ×両立できている）は平日の授業以外の学習時間が2.64h、休日が4.37hであるのに対して、両立タイプ7（部活動タイプ×両立できている）のそれは、平日が1.29h、休日が1.92hである。両立タイプ2（勉学タイプ×両立できていない）は、両立タイプ1よりは若干学習時間が短いものの（平日2.54h、休日4.07h）、他どの生徒タイプの学習時間より長い。興味深い結果である。

さて、両立タイプと技能・態度の獲得との関連はどのようなものであろうか。結果をわかりやすくするために、該当者の多い両立タイプを全体の5%以上の該当率を基準として、計7つの両立タイプ（1, 3, 7, 8, 10, 19, 21）を抽出して、**図表13**に結果を示す。それを見ると、全体的にもっとも得点が高いのは、両立タイプ1（勉学タイプ×両立できている）、次いで両立タイプ3（勉学タイプ×部活動をしていない）である。もっとも得点が高いのは、両立タイプ21（行事不参加タイプ×部活動をしていない）であり、次いで両立タイプ19（行事不参加タイプ×両立できている）である。同じ生徒タイプのなかでの得点差は見られるが、全体的には、勉学タイプの得点が高く、行事不参加タイプの得点が低いという、生徒タイプで見た特徴（前項(1)を参照）とほぼ同様の結果である。

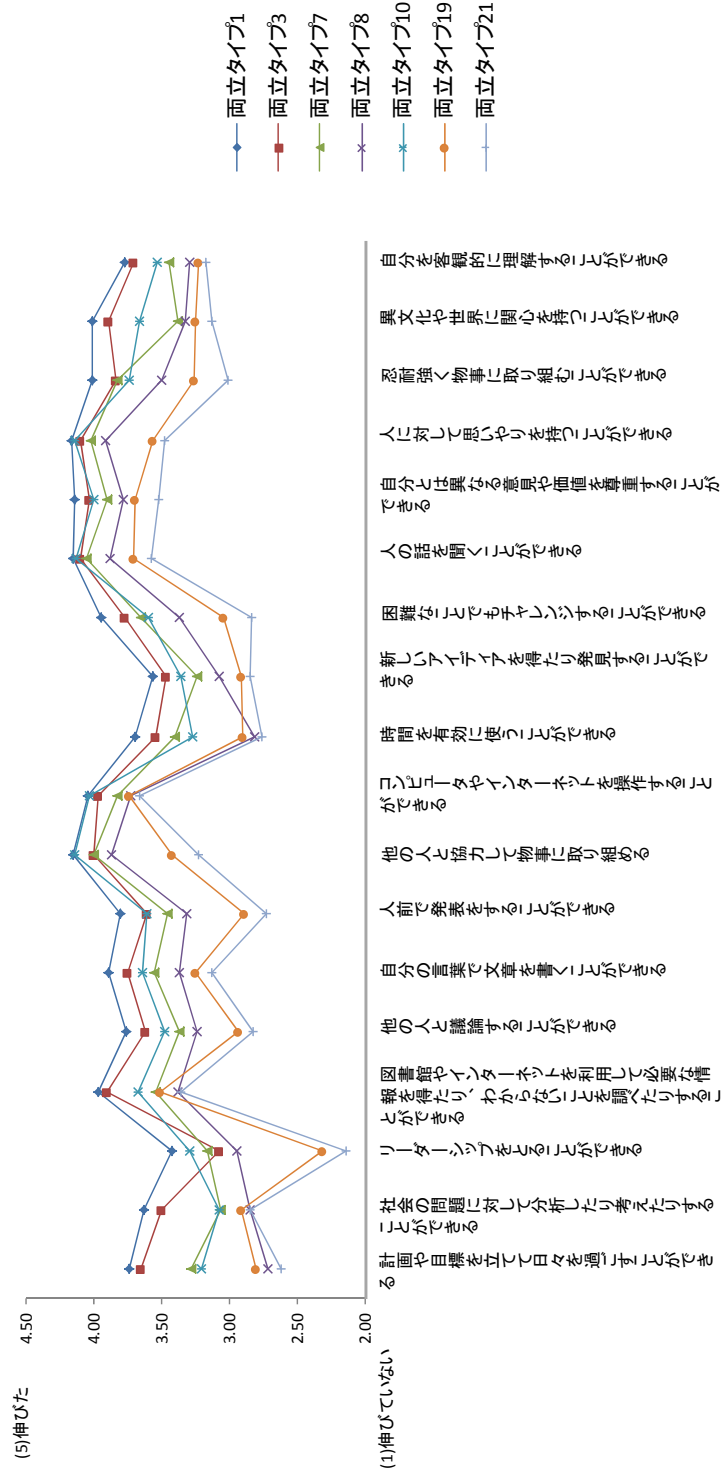
とは言え、高校教育の現場からよく聞いてきた、部活動と学習との両立が生徒の成長に大きな意味を持つという見方は、勉学タイプにおける部活動との両立という形態で、実証的に支持されると言えよう。

図表12 部活動と学習との両立タイプの作成

生徒タイプ	部活動と学習との両立	両立タイプ	該当数(%)	分析対象 (5%以上の該当率)	授業以外の 学習時間 (平日)	授業以外の 学習時間 (休日)
勉学タイプ	両立できている	1	5,536 (16.1)	★	2.64	4.37
勉学タイプ	両立できていない	2	1,172 (3.4)		2.54	4.07
勉学タイプ	部活動をしていない	3	1,984 (5.8)	★	3.09	5.00
勉学そこそこタイプ	両立できている	4	1,646 (4.8)		1.85	2.80
勉学そこそこタイプ	両立できていない	5	547 (1.6)		1.69	2.62
勉学そこそこタイプ	部活動をしていない	6	489 (1.4)		2.03	3.15
部活動タイプ	両立できている	7	5,078 (14.8)	★	1.29	1.92
部活動タイプ	両立できていない	8	4,276 (12.4)	★	1.10	1.69
部活動タイプ	部活動をしていない	9	0 (0.0)		-	-
交友通信タイプ	両立できている	10	2,381 (6.9)	★	1.25	1.77
交友通信タイプ	両立できていない	11	1,527 (4.4)		1.05	1.49
交友通信タイプ	部活動をしていない	12	1,573 (4.6)		1.20	1.62
読書マンガ傾向タイプ	両立できている	13	313 (0.9)		1.56	2.31
読書マンガ傾向タイプ	両立できていない	14	226 (0.7)		1.27	1.94
読書マンガ傾向タイプ	部活動をしていない	15	233 (0.7)		1.67	2.36
ゲーム傾向タイプ	両立できている	16	822 (2.4)		1.25	1.86
ゲーム傾向タイプ	両立できていない	17	814 (2.4)		1.01	1.44
ゲーム傾向タイプ	部活動をしていない	18	880 (2.6)		1.28	1.77
行事不参加タイプ	両立できている	19	1,812 (5.3)	★	1.72	2.67
行事不参加タイプ	両立できていない	20	1,295 (3.8)		1.49	2.26
行事不参加タイプ	部活動をしていない	21	1,762 (5.1)	★	1.74	2.66
		全体	34,366 (100.0)			

図表 13 両立タイプと技能・態度の獲得との関連

	計画や目標を立てて日々を過ごすことができる	社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる	リーダーシップをとることができる	図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たり、わからないことを調べたりすることができる	他の人と議論することができる	他の人と協力して物事に取り組める	コンピュータやインターネットを操作することができる	時間を有効に使うことができる	新しいアイデアを得たり発見することができる	困難なことでもチャレンジすることができる	人の話を聞くことができる	自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	人に対して思いやりを持つことができる	忍耐強く物事に取り組むことができる	異文化や世界に関することができる	自分を客観的に理解することができる
両立タイプ1	3.74	3.64	3.43	3.96	3.77	4.16	4.04	3.69	3.57	3.94	4.15	4.14	4.16	4.01	4.01	3.77
両立タイプ3	3.66	3.50	3.07	3.91	3.62	4.00	3.97	3.54	3.47	3.77	4.10	4.04	4.10	3.84	3.89	3.71
両立タイプ7	3.29	3.07	3.16	3.55	3.37	4.00	3.82	3.40	3.24	3.65	4.06	3.90	4.02	3.83	3.38	3.45
両立タイプ8	2.72	2.85	2.95	3.38	3.24	3.88	3.72	2.82	3.07	3.37	3.88	3.78	3.92	3.51	3.33	3.30
両立タイプ10	3.21	3.08	3.30	3.68	3.48	4.14	4.03	3.28	3.36	3.60	4.13	4.00	4.14	3.74	3.66	3.53
両立タイプ19	2.80	2.92	2.31	3.51	2.94	3.43	3.74	2.90	2.91	3.05	3.71	3.70	3.57	3.27	3.25	3.23
両立タイプ21	2.63	2.85	2.14	3.36	2.82	3.23	3.66	2.76	2.85	2.84	3.57	3.52	3.48	3.01	3.13	3.17



第3節 まとめと2時点目（大学1年生）に向けての課題

本章では、1時点目（高校2年生）を対象におこなった調査から、高校教育の現場に、高大接続あるいは10年トランジション調査の観点から結果をフィードバックするべく、クラスタ分析を用いて生徒タイプの抽出をおこなった。分析の結果、高校生は、平日・休日の一週間の過ごし方、行事参加、対人関係、自尊感情、キャリア意識の観点から、**図表14**にまとめるような特徴を示す7つの生徒タイプに分類されることが明らかとなった。

図表14 生徒タイプの特徴のまとめ

生徒タイプ	特徴	学習	友だち関係	自尊感情	キャリア意識
1 勉学タイプ	よく学び、将来に向けて頑張り、個人の成長を実感している生徒タイプ	○	○	○	○
2 勉学ほどほどタイプ	準勉学タイプ	○		○	○
3 部活動タイプ	部活動を中心に高校生活を過ごし、良好な友だち関係や集団行動には適応しているが、勉強はあまりやらず、将来のこともあまり考えていないタイプ	×	○		×
4 交友通信タイプ	友だちと遊んだり通信したりすることが高校生活の中心であり、良好な友だち関係を築いたり集団行動に適応していたりする。勉強はあまりしないが、将来のことは比較的良好に考えているタイプ	×	○		
5 読書マンガ傾向タイプ	読書したりマンガ・雑誌を読んだりして、ひとりで過ごすことが多く、友だち関係は弱く、自尊感情、キャリア意識は低いタイプ		×	×	×
6 ゲーム傾向タイプ	ゲームをしてひとりで過ごすことが多く、勉強はしない、友だち関係は弱い、キャリア意識も低いタイプ	×	×	×	×
7 行事不参加タイプ	友だち関係が弱く、自尊感情の低いことが学校行事への消極的参加につながっていると考えられ、将来のことも考えられていないタイプ		×	×	×

本章の結果が示唆することは、第1に、学習（授業以外の学習）とキャリア意識との密接な関連である。これは、「勉学タイプ」の特徴から明らかにされている。第1章で述べたように、この結果は、これまで大学生調査から得られてきたもの、振り返り調査ではあったが、ビジネスパーソンを対象におこなった調査から得られたものと、ほぼ同じである。

第2に、学習（授業以外の学習）と技能・態度の獲得との密接な関連である。これも「勉学タイプ」から明らかにされているし、大学生調査の結果と同じである。学習はあまりしないが、良好な友だち関係や集団行動に適応した「部活動タイプ」や「交友通信タイプ」は、対人関係に関する技能・態度項目において高い得点を示していたが、昨今社会が求める「他の人と議論することができる」「人前で発表することができる」の得点では、高い値を示さなかった。友だち関係や集団行動が良好であるということと、ディスカッションやプレゼンテーションができることとは、別次元の技能・態度であると理解する必要がある。

第3に、友だち関係や集団行動が弱い「行事不参加タイプ」「ゲーム傾向タイプ」「読書マンガ傾向タイプ」は、技能・態度の獲得、自尊感情、キャリア意識の側面において否定

的な特徴を示したことである。残り 4 つの生徒タイプの友だち関係や集団行動が肯定的であることを考えると、友だち関係や集団行動の弱さは、行事不参加やゲーム・読書マンガなど、どちらかといえば、ひとりで過ごす時間や生活への志向を高め、そのことが社会参加や社会性を弱め、ひいては技能・態度の獲得やキャリア意識も弱めてしまうのではないかと考えられる。今後、さらなる検討をしていきたい。

第 4 に、高校教育の現場からよく聞いてきた、部活動と学習との両立が生徒の成長に大きな意味を持つという見方は、**勉強タイプ**における部活動との両立という形態で、実証的に支持されたことである。他方で、部活動と学習とを両立していると回答していても、その生徒が他の生徒タイプ（部活動タイプ、交友通信タイプ、行事不参加タイプ）であると、技能・態度の獲得の得点は、勉強タイプのそれよりも低いものであった。部活動と学習との両立はたしかに重要であるが、授業以外の学習時間がどの程度あるかが問題にされなければならないと言える。

第 5 に、難関大学への進学が多いグループ I では「勉強タイプ」が多く、そうでないグループ III では「交友通信タイプ」が多く見られた。「行事不参加タイプ」は、大学進学グループに関係なく、どの学校にも 10～15%はいることがわかった。

最後に、2 時点目（大学 1 年生、2015 年実施予定）に向けての課題を 2 点述べる。

第 1 に、本調査からは、勉強タイプにおける部活動と学習の両立が、さまざまな側面における肯定的な特徴を示していたが、果たしてこれが、大学生になってからの力強い学びと成長につながるのか。興味深い検討課題である。

第 2 に、大学進学グループ I では、たしかに他のグループと比べて「勉強タイプ」の割合が多く見られたが、**図表 8**を見ると、大学進学グループ I でも、「部活動タイプ」～「行事不参加タイプ」まで、約 6 割の生徒が該当していた。彼らのなかには、3 年生になって受験勉強を一生懸命して、短期間で仕上げ、難関大学へ進学する者が少なからずいるだろうと考えられる。しかし、彼らの大学生になってからの学びと成長、技能・態度の獲得、キャリア意識はどうなるのだろうか。高校 2 年生のときに、できていなかった授業以外の学習やキャリア意識が、大学生になってできるようになっているのだろうか。逆に、大学進学グループ III のなかでも、割合は相対的に少ないながらも、「勉強タイプ」がないわけではない。彼らの大学生になった後の学びと成長はいかなるものとなっているだろうか。2008 年の学士課程答申以来の施策の根幹を問う問いである。結果を待ちたい。